

## 建学の精神を思う

The Fundamental Spirit of College

松山東雲女子大学第3代学長 磯村 滋 宏

Shigehiro ISOMURA

(松山東雲女子大学元教授)

松山東雲女子大学創立30周年を、発展のうちに迎えることができたのは、全ての関係各位の御努力の賜物である。心からお喜びを申し上げたい。この間に多くの有為な人材を世に送り出し得たことを、皆様方と共に誇らしく思う。社会が少子高齢化に向かうと同時に、私立大学の数は増え続けてきた。この中で、教育の質の向上と経営の維持を両立させることは、困難なことであつたに違いない。私自身はこの間、わずかな期間（2007～2011年）にこの仕事に関わつたにすぎないが、それでもこのことを十分に理解し得たと同時に、不十分なことしかなし得なかつたことに心残りを禁じ得ない。しかしながら昨年9月初旬に、久しぶりに本学を訪れ、かつての同僚（戦友！）の方々とお会いして親しくお話をできたことは、非常な喜びであつた。その際にいただいた次年度向けの大学案内には、高橋圭三学長の建設的なメッセージと共に、建学の精神が明記されてあつた。私の在任中、当時の山崎正幸宗教主事らと共に、本学の建学の祖・二宮邦次郎牧師の抱いた精神「信・望・愛」を、心を込めて明文化したものである。

「松山東雲学園の建学の精神は、「信仰・希望・愛」であらわされるキリスト教精神です。本学園は、この精神に基づき、神を畏れ、神による希望に生き、神と隣人を愛する、自立した女性を育成する教育をめざします。」

現在、我が国の国公立大学に比較して大多数を占める私立大学には、それぞれ独自の建学の精神を表明する義務がある。これがなければ建学の意味が薄れてしまうのは、当然のことである。大学は専門教育の機関であり、社会の特定分野で役立つ人を送り出すために、人材を育成する場である。「建学の精神」とは、そこで行われる教育の基本となる精神であり、それが向かう方向である。松山東雲女子大学は、この精神を、二宮邦次郎牧師が設立した松山女学校、その後開学した松山東雲短期大学から引き継いで歩んできた。その中心となる柱は、キリスト教精神である。

個人的な話になるが、私が70歳を越えた身で本学の学長の重責を荷わせていただく決心をしたのは、実に、このキリスト教精神が本学に生きていることを確かに伝え聞いたからであつた。無論私は、キリスト信徒の中にあつては、その道の落第生であろう。ただ、落第の身ではあつても、約半世紀の間、よろめきながらも、この道を歩み通してきた者が精一杯の努力をすれば、これを守り

通せるのではないか。神が助けて下さるであろう、と考えた次第であった。もうひとつ、私には忘れ難い体験がある。

本学就任の数年前のことであったと思う。当時私が所属していた「応用物理学会」の年次総会が、仙台市の東北学院大学で開催された時のことである。大会初日の夕刻、参加者一同が広い会場に集まり、懇親会が催された。約 1,000 名ほどが参加したであろうか。全く自由な懇親の場であるから、当然ながら会場は雑談のざわめきで満ちていた。その最中、突然に、壇上から、整然とした白と黒の正装姿の混声合唱団（総勢 40 名程であったろうか）の歌声が流れてきた。本学でもなじみ深い賛美歌 312 番の斉唱である。私は、我を忘れて聴き入った。「慈しみ深き、友なるイエスは、罪とが憂いを、取り去り給う、……」ざわめきが治まるまでに、時間はかからなかった。会場にいる全員が壇上を注視して、黙って耳を傾けた。圧倒的な迫力に加えて、清純さと慰めに満ちた空気が会場に溢れた。私には、今でも忘れ難い思い出として残っている。キリスト教主義を掲げる大学ならではのことであったと思う。これは東北学院大学の「建学の精神」（3L 精神——LIFE（命）、LIGHT（光）、LOVE（愛）——聖書、マタイによる福音書 5 章）を表しているのではないか。“本学の教育の土台は、この精神です”との主張が聞こえてくるように思えた。

ついでながら、東北学院大学は、愛媛県といくつかのつながりを持つ。創立者は、明治・大正期に活躍した我が国の著名なキリスト教伝道者、押川方義で、彼は松山市出身である。今や 9 学部、学生数 11,200 人の総合大学で、東北地域の私学の雄として知られる。さらにカール・バルト研究で著名な佐藤司郎先生は、かつて同学文学部で長く教鞭をとっておられたが、それ以前は、愛媛の大洲教会の牧師を務められた後、東京の信濃町教会（私の在京時の母教会）の牧会をされ、その後同大学に移られた方である。私は本学の学長時代にたまたま発生した東日本大震災の直後、同大学にお見舞いに出向いた覚えがある。

話がかなり偏ったものになってしまったが、現職から退いた者としては、表題のような大きなテーマの一般論を述べることは、むずかしい。要は、私立大学の建学の精神には、建学者が建学の際に抱いた強い願いと夢が込められているということである。これは、その学校（大学）が続く限り堅持されるべき精神である。松山東雲女子大学にあっては、二宮邦次郎牧師が抱いた強い信念「信・望・愛」のキリスト教精神がこれで、そこに基礎をおいた教育こそ、間違いなく社会に真の奉仕ができる教育である、という確信である。創立 30 周年を迎えた本学の前途には、幾多の困難が待ち受けているであろうが、それらを神の助けと導きによって乗り越え、さらに発展されることを、心から切望する次第である。